

# 死と「迷惑」 —現代日本における死生観の実情—

諸岡 了介\*

## A Qualitative Analysis on Attitudes toward Death and Dying in Contemporary Japan

MOROOKA Ryosuke

### キーワード

死生観、他界観、ホスピス・緩和ケア、在宅ホスピス、スピリチュアルケア

### 論文要旨

本稿は、在宅ホスピスケアを利用して看取りを行った遺族を対象にした調査票調査から、死に関する自由記述回答を分析することで、現代日本における死生観の一側面を描き出そうとする試みである。調査は2010～2014年の間に家族を看取った主介護者に対して行い、663票の質問紙を回収した。

分析から見出されたのは、次のようなパターンである。死の問題一般に対するときには、死はそれ自体として焦点化されず、目下の日常生活の是認へと向かう。自分自身の死に関する記述では、「迷惑をかけない死」という経済的・社会的な負担の問題に関心が集まっている。これに対して、身近な死者に関する記述では、死後も存続するものや、死者の行方について多く語られている。

本調査結果の全体的傾向からは、実際の人々の死生観は、療養場所の選択や介護負担・経済的負担といった現実的問題と切り離しえないことが示唆された。

### 英文要旨

This paper aims to elucidate patterns in the attitudes toward death and dying among contemporary Japanese people. A research team including the author conducted a questionnaire survey of bereaved people who had cared for a family member until their death while receiving home hospice care between 2010 and 2014. Responses from a total of 663 people were collected.

Analyses of the collected responses showed the following patterns: in references to death as a general topic, what implicitly constituted the focal point was present-day, daily life rather than death itself. In descriptions of the expectations of one's own death, many respondents showed a preoccupation with the burden of finances and care. However, on the contrary, in accounts of a person who died, respondents often indicated that the deceased left something of value to their family or that they continued to feel their presence after their death.

Previous studies on this subject have tended to focus exclusively on the notion of an afterlife or afterworld. However, the overall results of this study suggest that the notions and attitudes toward death among Japanese people are inseparably combined with the interests in mundane issues such as the availability of care services or the burden of finances and care.

---

\* 島根大学教育学部

## 1. 問題

### 1-1 はじめに

本稿は、在宅ホスピスケアを利用して看取りを行った遺族を対象にした調査票調査の結果から、現代日本における死生観の一側面を描き出そうとする試みである。調査の概要については後段にて述べるが、本調査が有する第一の特徴は、実際に身近に看取りを経験した人を対象としている点である。また、第二の特徴は、選択式の設問ではなく、「自宅での介護や看取りの経験を通じて、死について感じたことや考えたことをご自由にお書き下さい」という自由度の高い質問に対する回答だという点である。次節では、こうした特徴を持つ調査研究として、本稿の試みが意図するところを、死生観をめぐるこれまでの研究状況に照らして説明していきたい。

### 1-2 研究状況と本研究の狙い

今日の日本社会では、死生観という主題に対する社会的関心は高く、理想や規範を語るもの、教義的な立場から語るもの、あるいは個人の経験や思想を表明したものなど、死生観に関する多くの言説が作りだされている。人文社会科学の研究実践の方に目を向けると、「日本人の死生観」を考える上で歴史や民俗に取材した研究は枚挙にいとまがないが、現代日本における人々の考え方の実態を直接対象とした研究はそれほど多いわけではない。

ひとつの手法としては、文学者や思想家の所論を考察することで、現代における「日本人の死生観」に迫ろうとする研究がある。そのもっとも代表的なものとしては、加藤・ライシュ・リフトン (1977) や、島蘭 (2012) が挙げられよう。

また、直接に一般的な生活者の考え方にアプローチしている研究としては、各種の社会意識調査がある。たとえば、NHK放送文化研究所の「日本人の意識」調査には「あの世」を信じるかという設問が含まれているし、しばしば脳

死・臓器移植や延命治療の是非といった社会問題との関連で、各新聞社でも同様の調査を実施してきている (NHK放送文化研究所 2015、石井 2007)。研究者による社会意識調査としては、金児 (1997) や林 (2007)、浅見・中村・伊藤 (2016) といったものがある。

また、広く一般の人々全体を対象にしたこれらの社会意識調査に対して、ケア関連領域を中心に、子ども、青年、高齢者、がんなどの疾患の患者、死別経験者、医療・福祉従事者など、特定の条件下にある人々を対象を区切った意識調査が実施されてきており、近年その数を増している。これらの研究動向については、海老根 (2008)、京田・加藤・中澤他 (2009)、高岡・紺野・深澤 (2009)、彦・田島 (2011)、中木・多田 (2013) などから窺うことができる。

死の問題に対する意識は、それを差し迫ったものとして捉えたときと、そうではないときとで大きな差が現れる。このことから、とりわけ高齢者や重篤な患者、死別経験者に対する調査研究は、人々の死に対する意識や姿勢を探る上で独特の意義を持っている。この点では、自宅看取り経験者すなわち死別体験者を対象とする本稿の調査研究 (以下、本調査研究ないし本調査と表記する) も、ケア関連領域におけるこれら先行研究と共通している。

ただし本調査研究が、ケア分野における先行研究の多くとは異なるのは、次の二点においてである。第一点として、心理学も含め、ケアと隣接した分野で実施された調査研究は、それが与える心理的効果との関連で死生観を扱う傾向が強いことである。第二点は、対象を広く取る社会意識調査にも共通していることであるが、医療・福祉領域では特に「エビデンス」志向が強いこともあり、多くの調査研究が数量的な分析手法を取っていることである。この流れの中では、死生観や死に対する態度を調査・分析するための心理尺度も開発が進められてきている (吉沢 1968、杉山・方波見・中野 1986、藤田 2000、安保 2008など)。

ケア関連領域では、死に対する意識を扱った質的な研究も少なくはないが、だいたい面接調査の手法を採っており、その対象者は比較的少数にとどまっている。自由記述式で600通以上の回答を得た本調査は、この主題に関する質的調査としては、対象数の多さにおいて特徴的である。

しかし、たんに対象数のこと以上に、種々の先行研究に対して本調査研究が新たに試みたいことは、いったい何を「死生観」として数えるのか、その範囲の問題をひとつの主題として考察に含めることである。特に数量的な分析では、何をもち「死生観」と見なすか、その枠組みは研究者の視点によって予め定められている。本稿では、自由度の高い記述回答の分析を行うことで、いわば従来の調査ではノイズとして予め排除されてきた事柄も含めて、人々の持つ「死生観」なるものの内包と外延の両面を検証しようとするのである。

### 1-3 死生観概念の整理

以上の先行研究の概観と並行して、「死生観」という概念についても簡単に整理をしておきたい。この死生観という語には、広義の用法と狭義の用法とを認めることができよう。広義の用法では、ほんやりとしたイメージであれ、あるいは矛盾を孕むものであれ、およそ死と生に関する考え方や姿勢全般が死生観の内に含まれる。これに対して、狭義の用法における死生観とは、死と生に関して反省的に吟味され、本人が主体的に引き受けた思想を指している。

狭義の用法における死生観は、しばしば「死の恐怖」を相手どって、「死ぬ覚悟」ないし「死の受容」をもたらすための要件であり課題であるとして語られてきた<sup>(1)</sup>。たとえば、戦時中の兵士の間で問題にされてきたのはこの種の死生観であろうし、現在でも、死に対して「自分なりの死生観を確立することが必要である」とする発想が広く存在している。ケア関連領域でも同様に、人が「死を受容」し、「穏やかな死」

を迎えるための要件として「死生観の確立」を課題として捉える見方は広く見られる。

本稿は、実態を探り記述することを主眼とする調査研究として、「死生観を確立すべき」という前提からは距離を置くとともに、研究対象を狭義の死生観だけには限定しない。たとえば、「特に死については考えない」といった考え方もまた、死生観の一種として捉える立場に立つ。

しかしながら一方で、人間の生活には死という出来事がつきものであり、人生の課題として、死や生をいかに理解するかという問題を突きつけられる場面がしばしば生じることも、事実である。そうした場面においては確かに、主体的な思想として「確固たる死生観」を持つことが、ひとつの有効な手立てになりうる——ただし唯一の手立てではない——にちがいない。身近な人の死であれ、自分の死を予期させる事柄であれ、死に関わる出来事を経験する中で、死に対する思想や姿勢を反省的に固めていく人もいれば、そうでない人もいる。本稿が注意を払いたいのは、その辺りの機微である。本調査の対象がたんに人々一般ではなく、自宅看取りを経験した死別経験者であることの意味のひとつもここにある。

本調査に寄せられたのは、家族を看取った記憶も新しい人々による生々しい記述である。ただし、まったく当然のことながら、質問紙に記入されたテキストであるその記述をそのまま、その人の死と生に対する考えや姿勢そのものと考えすることはできない。以上のことを改めて確かめた上で、人々の考えや姿勢に迫るための貴重な手掛かりとして、寄せられた言葉の分析を進めていきたい。

## 2. 回答全体の傾向

### 2-1 調査概要

以下、本稿にて紹介するのは、宮城県5ヶ所、福島県2ヶ所の在宅ホスピス・緩和ケア診療所について、そのケアサービスを利用しながら在宅療養を行った患者の遺族に対する調査票調査

の一部である（実施者：相澤出・田代志門・藤本稜彦・板倉有紀・諸岡了介）<sup>(2)</sup>。2010年1月1日～2014年2月28日までの間に在宅療養を行い、患者死去後12ヶ月を経た主介護者全体（総数2,223）について調査協力の可否を伺い、調査協力可能との回答があった837件に調査票を送付して、663票を回収した（回収率30%、回答率79%）。

本稿で扱うのは、本調査中、「自宅での介護や看取りの経験を通じて、死について感じたことや考えたことをご自由にお書き下さい」という自由記述式の設問に対する回答である。この設問に対し、回収した全663通の内、「特にありません」といった内容のものを除くと、何らかの記述が返されたのは442通であった。

## 2-2 回答の全体的傾向

最初に、回答全体の中にどんな種類の記述が多かったのか、その傾向から確かめたい。なお、1通の回答の中には、しばしば複数の種類の記述が含まれている。

- ・「長く患者といられてよかった」など、家族の立場から在宅で看取る意味を述べた回答……96件
- ・「人が死に向かう様子を目の当たりにすることができた」など、看取りから得られた経験や洞察を述べた回答……96件
- ・「介護体制さえ整えば、自宅看取りが普及することが望ましい」など、ホスピス・緩和ケアに関する一般論や提言を述べた回答……91件
- ・「介護するあいだ不安が大きかった」など、介護生活全般について述べた回答……85件
- ・「死とは自然の現象であると思った」など、死について述べた回答……79件
- ・「自分も自宅で家族に看取られたい」など、自分自身の死に方の問題を述べた回答……77件
- ・「もっと優しくできたのでは」など、介護に

- おける心残りを述べた回答……66件
- ・「家で暮らすことができ、喜んでいた」など、故人による在宅療養の評価を述べた回答……63件
- ・「最期の瞬間は穏やかだった」など、故人の最期の様子について述べた回答……59件
- ・「輪廻転生はある」など、何らかのかたちで他界観に関わる話題に触れた回答……27件

ここでまず気づかれるのは、「死について感じたことや考えたこと」を問う設問にもかかわらず、死の問題に直接に触れた記述よりも、自宅での介護生活の大変さやその意味、あるいはそこにおける思い出や心残りといった事柄を述べた記述の方が多くことである。

「死について感じたことや考えたこと」を尋ねた質問に対して、「介護生活は不安で負担も大きかった」等と応じた回答は、たしかに的的外れであるかもしれない。こうした回答を、人々の死に対する観念を析出する上で、関連がないものとして考察の外に置くこともできよう。しかしながら、こうした設問に対して、死そのものの問題に直接には関わらない回答がこれほど多く寄せられること自体が、現代日本における死の理解の一面をリアルに示すものとも言えないだろうか。すなわち、本調査の対象者のような一般的な生活者にとって、死の問題はそれ自体としては焦点化されにくく、第一には、介護負担の如何や、在宅か病院かといったケアサービスのあり方の問題として意識されるものだということである。

全体的傾向として以上のような特徴を踏まえた上で、続いてはその内実を探るべく、死に関わる話題に直接言及のあった自由記述回答の内容を、「死一般の理解」・「死者への思い」・「来たるべき自分の死」という範疇ごとに分析を行う。結果を先取りして言えば、これら3範疇の回答はそれぞれ異なる傾向を有しており、その相違の中に現代日本の死生観のあり方が透けて見えてくるのである。

### 3. 死一般の理解

まず、死一般について語った回答についてみていきたい。それぞれの自由記述回答が、固有の意味や背景、独特のニュアンスを有した貴重な資料であることから、本稿では可能なかぎり多くの回答を紹介することを心がけた。一方で議論の筋道としては、調査全体から伺われる大きな傾向を示すことに徹して、ある程度大まかな分類の下に分析を進めていく。

#### 3-1 「死は身近」

まず、家族を看取するという経験を通じて、死を身近に感じるようになった、あるいは死について考えることを促されたという趣旨の回答がいくつか見られた（9件。以下それぞれ一部を紹介）。

死というものが身近だと感じました。〔回答者：40歳代男性・夫、故人：40歳代女性。「夫」とは、看取った故人との関係を指す。以下同様〕

今まで死についてはあまり考えない様になりました。が、主人の死後、常に頭の一角にある様に思います。〔回答者：60歳代女性・妻、故人：60歳代男性〕

自分も年を取っていき、それと同時に親も年を取っていく。いずれは訪れる「死」。今回の事で、もの凄く考える様になり、思う様になりました。無理をせず楽しく、笑って、これから生きていきたいです。〔回答者：50歳代男性・息子、故人：80歳代男性〕

今まで身近でなかった死が続き、自分も年齢的に考えるようになってきました。その立場になった時、どうすればよいか？……いざという時、どうなるのか、想像がつきません。〔回答者：60歳代女性・妻、故人：60歳代男性〕

気力がなくなり（抜けて）、死んだら、どのようになるのだろうか、どこへ行くのだろうか。無気力……生きることの大切と同時に生きることのめんどくささ。〔回答者：40歳代男性・夫、故人：40歳代女性〕

死について言葉にすることはタブーのような気がしていましたが、父を亡くしてから、死は身近なことだったと改めて考え直し、母と、死んだらこうしてとか気軽に話しをする機会が増えたように感じます。〔回答者：50歳代女性・娘、故人：90歳代男性〕

#### 3-2 「死は考えない」

このように、看取り経験を通じて死について考えたという回答とは対照的に、特には死について考えなかった、あるいは考えないと述べた、以下のような回答もあった（5件）。

死についてあまり感じたことはない。〔回答者：70歳代男性・夫、故人：70歳代女性〕

死についてはあまり考えたことはなかったですね。主人が死亡し本当にさびしいです。〔回答者：70歳代女性・妻、故人：80歳代男性〕

あまりにもあっけなく亡くなられてしまったので、死に対して何も考えられません。後悔の念だけです。〔回答者：70歳代女性・妻、故人：70歳代男性〕

残された命を精一杯生きることだけを考えていたように思います。死については考えないようにしていました。〔回答者：60歳代女性・妻、故人：60歳代男性〕

私の場合は両親兄弟姑、皆な看護したのであまり考えなかった、その後の事だけです。死についてはあまり考えない。〔回答者：70歳代女性・妻、故人：70歳代男性〕

### 3-3 「死は突然」

次は、死の訪れ方に関する記述である。死の訪れが「突然」であることや、「はかなさ」や「あっけなさ」に触れた回答には、以下のようなものがあった（10件）。

病院でも在宅でも死とは突然に訪れるものだと痛感致しました。〔回答者：60歳代女性・妻、故人：60歳代男性〕

生はもろくあっけなくはかないと身にしみて感じます。〔回答者：50歳代女性・妹、故人：60歳代女性〕

自分の思うとおりにはいかない。無常である。〔回答者：70歳代男性・夫、故人：60歳代女性〕

人はあっけなく死んでしまうこともわかっていますが、やはり家族の死はつらいです。……人が死ぬということは本当に大変なことです。〔回答者：30歳代女性・娘、故人：70歳代男性〕

いつ死をむかえるのか本当にわからない。一生懸命に生きる母を見て、命のありがたみ、大切さ、そして普通に生活できること、健康であることはとても素晴らしく貴重なことであると学ばせてもらった。〔回答者：30歳代女性、故人：60歳代女性〕

### 3-4 「死は避けられない」

また、死一般を語った記述の中でもっとも目立つのは、「死は避けがたいもの」だという事実を発見ないし再確認したという主旨のものである（15件）。

人は、どんな人でも必ず死ぬんだということ。自分の親だけは死なないと思っていましたが、そんな事はないんだということがわかり

ました。〔回答者：50歳代男性・息子、故人：80歳代男性〕

人はいつかは死ぬという事を非常に強く感じました。自分もいつかはその時がくるのであろうが、どのような状態でいつなのか選択できない事が無情であると同時に人間として受け入れないといけないのでしょうか。〔回答者：60歳代女性・妻、故人：60歳代男性〕

人が死を迎える時、どのようなものなのかを先生にレクチャーしていただき、その時を受け入れるしかないと実感した。〔回答者：60歳代女性・妻、故人：60歳代男性〕

何人も死を予期できる訳でもない以上、受け入れるしかないように思います。問題は死に至るまでの延命処置の是非だと思います。〔回答者：60歳代男性・息子、故人：80歳代男性〕

死については、時期が来たんだ、寿命だと考えます。〔回答者：60歳代男性・夫、故人：60歳代女性〕

生命には必ず死がおとずれるので、死に対して特別な思いはありません。〔回答者：50歳代女性・義理の娘、故人：80歳代男性〕

死という事は人の力、金の力ではどうにもならない。生まれてきた時に自分の寿命は定められているので、私は今1人で生活していますが先の事考えず、今日を楽しく生活していきます。〔回答者：70歳代女性・妻、故人：70歳代男性〕

### 3-5 「死は自然」

死を不可避の事実とする捉え方となだらかに連続しつつ、もう一歩具体的な意味づけが含まれるのが、「死は自然なもの」という言い方で

ある。「死は自然なもの」という表現には、「死は、人間にとって正常で本来的な過程ないし出来事」という意味と、「死は、生理的・生物学的な過程ないし現象」という意味のふたつが併存しており、ときに重ね合わされて用いられている。回答の数は3件と少ないが、ここに紹介しておく。

ある年齢以上の死は、病気でも（老衰でなくとも）生きるものの宿命と考えます。それ程忌み嫌う事ではない、自然のことと思います。それ故感謝して、精一杯生きたいと考えます。〔回答者：70歳代女性・妻、故人：70歳代男性〕

生から死は特別なことでなく苦しいものでもなく、自然に移されていくものと思えました。〔回答者：90歳代女性・妻、故人：90歳代男性〕

死はあくまで自然の現象である。〔回答者：60歳代男性・息子、故人：90歳代男性〕

### 3-6 死一般に関する記述の特徴

以上、死一般に関する記述としては、「死は身近」・「死は考えない」「死は突然」・「死は避けられない」といったものが多くを占めている。これらの記述に共通する全体的傾向として、死の訪れや時機に関する感じ方は異なっている。死とは、端的にいつか必ず訪れる事実とだけ理解されており、死とは何か、生の意味とは何かといった疑問を改めて喚び起こすものではないということである。この範疇の回答の中では、明らかに死の存在を疑問として捉えている記述は、「死んだら、どのようになるのだろう、どこへ行くのだろう」と述べている1件のみであった。

むしろ、顕著に見られたのは、「誰でもいつかは死ぬ。だから今の人生を精一杯生きなければならぬ」という主旨の記述である。ここで

は、「死は突然来る」という認識であれ、「死が不可避である」という認識であれ、それがそのまま直接に、現下の人生の是認へと結びついている。死の事実の認識が即座に日常的な生に対する視点へと切り替えられるという点においては、上に掲げたような「死について考えた」という回答群と、「死については特に考えなかった」という回答群との間には、見た目ほどには距離はないと言える。象徴体系としての他界観を主題とする従来の死生観研究には、天国・地獄といった特定の他界観に媒介されることによって、死の事実が説明されうるとする前提が広く見られる。しかしこれらの回答群は、そうした前提を否定するものである。

## 4. 死者への思い

続いては第二の範疇として、亡くなった人に関わって死の問題に触れている回答の内容を確かめる。この範疇の回答には、死後に存続するものという主題がしばしば現れてくる。

### 4-1 死者の見守り

まず、亡くなった人の存在が何らかのかたちで続いており、生者である自分を「見守ってくれている」といった種類の記述を含む回答が複数見られた。

毎日手をあわせ一日の出来事話しています。〔回答者：60歳代女性・義理の娘、故人：80歳代女性〕

夫の介護経験により、死に対する恐怖心というものが薄れたような気がする。一日一日を大切に、今出来る事を考え、残された人生を夫の分まで謳歌しなければ、天国にいる夫に合わず顔がない。……最近、良い事ばかりあるので、夫が見守っていると確信している。〔回答者：50歳代女性・妻、故人：50歳代男性〕

親が残してくれたいろいろな物や思い出に感謝しつつ、楽しみも少し味わって生活しています。しっかりとお線香もあげています。そうする事で見守ってくれるのではないかと甘い期待をしています。〔回答者：60歳代女性・娘、故人：80歳代女性〕

孫が（当時2才）母の写真をみて「おばあちゃんが笑ってる」と言いました。母の写真は笑っていませんが孫には笑っているようにみえた……というより、笑ったのだと思います。それをきいて、死んだあとも母が私たちを見守っていてくれていると思いました。〔回答者：60歳代女性・娘、故人：80歳代女性〕

今でもいつも笑顔で私の側にいてくれる気がします。「無」となった父の命は私にとって永遠に「有」と思えます。「亡くなったら終り」ではないのです。〔回答者：60歳代女性・娘、故人：90歳代男性〕

よく人は亡くなると若い頃の姿に戻るといいますが、実際にそうなのではないか？と感じた。亡くなって全て終りになる訳ではないと思う。今でもいろいろな場面においてお母さんが助けてくれたと思うことがたびたびある。〔回答者：40歳代女性・娘、故人：70歳代女性〕

#### 4-2 「死は終わりではない」

亡くなった人が「見守ってくれている」という話ではなくても、故人を看取った経験を通じて、人の存在や生き方など、何らかのものが存続しており「死んで終わりではない」という認識に至った回答として、次のようなものもある。

自分は妻が亡くなる前は死は無になると思っていたが妻がなくなり、そう思わなくなりました。寂しいもの。〔回答者：60歳代男

性・夫、故人：50歳代女性〕

死んで終わりではないと思う。魂をより近く感じるようになった。〔回答者：50歳代女性・妻、故人：60歳代男性〕

「愛情」「精神」「生き方」……決してなくなってしまうものではなく、むしろ日を追うごとに強く思い出され忘れる事はできないし、忘れない。〔回答者：40歳代女性・娘、故人：70歳代男性〕

死は本人にとっては何ものでもないけれど、死によって（死の態度によって）まわりに多くのものを残すことができるのだなあ。〔回答者：60歳代男性・夫、故人：50歳代女性〕

死は肉体的には一つの節目となり、一回切りの人生という意味でもあるけれど、その奥にあるものは限りのないものだと感じる。看取る側、看取られる側は肉体的な事で死を始点にして新しく生命同士の交流があると感じる。もちろん、介護、看取りだけでなく、様々な人間同士、生物同士の生命の交流は死をもって終息するのではなく、新しいつながりを創生していくのだと思う。亡くなっていった人々に見守られ助けられている事は自然な事で穏やかに想ったり、和やかに祈る事がそういった人々、そして人生上では出会えなかった人々も含めて深い交流になっていくと思います。〔回答者：40歳代男性・息子、故人：70歳代男性〕

これらの回答のひとつの特徴として指摘できるのは、「死んで終わりではない」として、死を超えて継続すると考えられているものは、「愛情」や「生き方」のように現世内の事柄だという点である。「魂」ということにしても、「魂をより近く感じるようになった」と言われているように、それは遠くにある死後世界に存

在しているというよりも、残された家族の日常生活に近いところに存在していると観念されているように思われる。

#### 4-3 死者との再会

また、「死者との再会」というモチーフが含まれる回答としては、以下のものがあつた。これらの記述にはしばしば「あの世」「あちらの世界」といった表現が含まれている。それは必ずしも明確なイメージではなく、たんなる慣用的な修辭に近いと思われる場合もあるが、ここに一種の他界観を認めることも可能である。

死はこわくはないですが、目標が一つ（下の孫）剣道で3年間応援出来たら、その土産話を持って、あの人の元に行きたいです。3年間がんばろう!!〔回答者：70歳代女性・妻、故人：70歳代男性〕

死というと悪いイメージがある人もいると思うが、生をまっとうして天に召される苦しい病気からの卒業。あちらの世界で楽しくしてと思う。〔回答者：40歳代女性・娘、故人：70歳代男性〕

私は死は怖くありません。母も父もあの世にいるし、そうなつた時は私のお役目が終了した時だと思つからです。肉体はなくなつても、魂は生きつづけると信じておりますし、また愛しい人たちと再会できると思つからです。〔回答者：50歳代女性・娘、故人：70歳代男性〕

母の死が悲しくないわけがありませんが、私はやがてまたみんなと会えると思つています。〔回答者：60歳代女性・娘、故人：70歳代女性〕

1人旅立つ時は淋しくなく母と主人に会える事を考えながら、あちらの世界に行けると

思つています。〔回答者：60歳代女性・娘、故人：90歳代女性〕

#### 4-4 宗教的な他界観

死後世界についてより明確なイメージを表明した記述としては、以下の回答があつた。

この世で生活するには肉体が必要だが、あの世で生活するには肉体はこの世に残り霊だけがいくことになっている。〔回答者：80歳代男性・夫、故人：80歳代女性〕

私は輪廻転生はあると思つていますし、人が生まれてくる意味も感じています。私は何の宗教に属している訳でもありませんが、こういう事をみんなが知れば、世の中の「生・老・病・死」等の苦しみからみんながもっと救われるのになあ、と思つています。〔回答者：50歳代女性・義理の娘、故人：80歳代女性〕

死んでも父の魂は生きていました。輪廻転生は、思つていた通り、本当でした。つまり、体は魂を運ぶ舟の様なものだという実感を、亡くなってからの父との会話で得る事が出来ました。〔回答者：50歳代男性・息子、故人：70歳代男性〕〔\*別の設問に対する回答をみると、回答者は父の死後に、「はっきりと」その声を聞く体験をしたとのこと〕

私はこの地球で生かされていることは修行の場だと思つています。汚れた魂しいをこの世できれいに磨き、そして、年をとり、又、あの世に戻つて行くのではないかと思つております。そしてきれいになつた魂しいは二度と、この世には戻らない、天国で生き続けるものと考えております。……わかりませんがネ!!〔回答者：60歳代男性・息子、故人：80歳代女性〕

今回自宅で父を看取りましたが、死をこん

な身近で見たのは初めてです。ずっと天の国に望みをおいていた父がイエス様のいる天の国に行きました。天国がすごく近くなったような気がして、父との再会が待ち遠しいです。〔回答者：40歳代女性・娘、故人：80歳代男性〕

私たち家族(患者も含めて)は、クリスチャンです。死に対する恐れはあまりありません。父なる神様のみもとにおかえしすることをおぼえていましたし、本人も神様にお会いできる希望を握って終末を迎えました。本人も「先に神様のところに行って家族にまた会えることをたのしみにしているからね……」と口ぐせのように語っていました。死が終わりではなく、それからの永遠の時が与えられていること、このような考えが全てではないでしょうが、人生の幕をおえる時、しっかりした生死に対する価値感(絶対的価値感)[マ]は全ての人に必要ではと感じるところです。〔回答者：50歳代女性・義理の娘、故人：90歳代女性〕

物心がついた頃より教会に通い亡くなったら神の国に行くのだと教えられていたもので自分も死ぬことに対し不安はあまりありません。〔回答者：70歳代女性・妻、故人：70歳代男性〕

本調査全体を通して、はっきりとした他界観を述べた回答、いわば「もっとも死生観らしい死生観」を述べた回答は、ここに掲げたものに限られている。特定の宗教との関わりについて触れた記述も、いずれもキリスト教徒からの回答と思われる上掲の3件しかなかった。仏教との関連を想像することができる記述は、上記7件の中に「輪廻転生」という言葉が2件、「生・老・病・死」という言葉が1件含まれていたほかは、他の範疇に分類した回答内にみられた「無常」という表現や、「線香をあげる」とい

た表現くらいしか見当たらない。

#### 4-5 新しい関心の芽生え

死や生に対する特定の考えを述べた回答とは別に、身近な人を看取った経験をきっかけに、死後世界や宗教への関心が湧いてきたという変化を述べた回答がいくつかあった。

突然娘を亡くし、ボーッとしてるところにあの大震災、姉・おい・叔母そして友人等を亡くし本当につらい日々でした。何かにつけ生きてたころのことが思い出され……。一瞬に愛する人達を見送りやはり“あの世”ってあるのかも、皆んなのいる所に自分も行きたい、楽しいだろうなーって考えました(両親・義両親をみとったときはそう思いませんでしたが)〔回答者：70歳代女性・妻、故人：70歳代男性〕

死後の世界を信じる気持ちはありませんでしたが、信じたいとは強く思うようになりました。〔回答者：50歳代男性・夫、故人：40歳代女性〕

死生観として宗教に対する興味が出て来た。〔回答者：50歳代男性・夫、故人：50歳代女性〕

人は死に面して、やはり、宗教感[マ]や神、また死後についてや、復活などを考えますが、それもそれぞれの大切な希望となれば、価値あるものになると思います。〔回答者：80歳代女性・妻、故人：80歳代男性〕

前節にみたように、一般的な死の事実を認識することは、必ずしも「あの世」のことを考えるきっかけとはなっていなかった。それに対して本節で扱った、身近な家族の死に触れた記述の中には、亡くなった人の行方を考える先に「死んでも終わりではない何ものか」に思いを

馳せるという傾向が広く認められた。

また同時に、そこで重視されていることは、あくまで亡くなった家族の「存在」や彼らとの再会の可能性であって、「あの世」そのものではないことも、これらの回答の多くに見てとることができる。むしろ、「あの世」の構造や詳細についてははっきりと述べずに、たんなる修辭と区別がつかないような語り口で曖昧なままにしておいた方が、死者の見守りや彼らとの再会を語りやすいといった事情さえ伺われるように思われるが、どうであろうか。

## 5. 来たるべき自分の死

今度は第三の範疇として、自分自身の死の方に触れた回答について見てみたい。

### 5-1 自分の死に場所と理想の死

自分自身の死に関する記述として、もっとも多く出てきた主題は、死に場所の選択である。自分自身の死に場所を語って「自宅で最期を迎えたい」と述べた回答は24件であった。これらの回答に特徴的なことは、そのほとんどに「できることなら」といった但し書きがついていることである。

私と主人もできる事なら自宅で最期を迎えたいねと言っています。〔回答者：50歳代女性・義理の娘、故人：80歳代男性〕

出来るならば私も自宅でと思っていますが、今は一人ぐらしなのでそこの所が心配です。娘も勤めがあるので、不安です。〔回答者：60歳代女性・妻、故人：60歳代男性〕

私自身も自宅での看護を希みますが一人暮らしでは無理なのでしょうか。自分の意思にそった看取りの施設があったら知りたいと思います。〔回答者：80歳代女性・妻、故人：70歳代男性〕

「自宅は無理」「自宅は希望しない」という回答は11件ほどであったが、その中には状況が許さないからという理由のものが多い。つまりそれらの回答は、条件さえ整えば自宅での最期が望ましいと考えていると推測され、「できることなら」と但し書きつきで自宅での最期を希望する回答と連続したものと解釈できる。

私は家族に迷惑をかける事、家族の関係が悪くなったりする事より、病院でも良いかなと思ってます。〔回答者：50歳代男性・夫、故人：50歳代女性〕

床に臥した時の事を考えますと一番在宅療養を望みたいですが、子供達への負担等を考えますとホームでのホスピスを願っています。〔回答者：70歳代女性・妻、故人：70歳代男性〕

義父は家を築き、息子、孫達と暮らしてきて、死ぬ時は家がいいと言っていましたので、その希望に少しでもかなえてあげられたのかなと思いました。自分の立場では今のところのぞまないと経験上感じました。もう少し年をとり体も弱ってきて不自由になったらまた考え方も変わるかもしれないが……！ 自宅で2～3人の交替で介護してくれるのであればいいのですが、1人に負担がかかるのは、申し訳なく思ってしまう。〔回答者：50歳代女性・義理の娘、故人：80歳代男性〕

自分は自宅で看取りするのが一番良いと思いますが、夫の父、母、ほとんど自宅で見ましたが、今後私の場合は時代ですので施設に入り、時々、家族に来てもらった方が良いかと思う。〔回答者：60歳代女性・妻、故人：60歳代男性〕

## 5-2 「迷惑をかけない死」

自分自身の死を語る回答の中非常に多く見られる表現は、「迷惑」である。前節に挙げたもの以外にも、「迷惑をかけない死」に触れた回答には、以下のようなものがあった。

誰でもいつか迎える死ですが、子供に迷惑をかけずに穏やかに……と願っています。〔回答者：60歳代女性・娘、故人：80歳代女性〕

死についてはあまり考えない、ただ娘たちに迷惑掛けないよう、年も年なので身辺整理だけはと思います。〔回答者：70歳代女性・妻、故人：70歳代男性〕

どんな病気になるか不安ですが、〔自分が看取った〕患者と同じ、誰にも迷惑をかけず、痛む事もなく、苦しみもなく安らかに眠ったように行きたいです。〔回答者：70歳代女性・妻、故人：70歳代男性〕

病院でもう治療はありません、と言われた時、「あーこれで自宅で見るとか」と思ったものの、何の知識もない自分たちに、介護の経験をさせてくれた母に感謝し、いつか来る自分の終わりの時も、まわりに迷惑かけずにできればと思っています。〔回答者：50歳代女性・娘、故人：80歳代女性〕

私自身も闘病生活が長期化することで、周りに迷惑を掛けたり、かと言って突然に訪れる死ではなく、近しい人とお別れができるような死を望みます。〔回答者：50歳代男性・夫、故人：50歳代女性〕

医療制度の改革や、自宅での介護で過度な医療は不要です。私は自筆で末期医療の対処法は意識がなくなったら、点滴や胃ろうなどは不要で早めに黄泉の国に行く様にした。何故ならば、家族や親族に大きな負担をかける

だけであるからである。脳溢血で意識なくなったら医療処置しなくて良い。夢や希望のない人生は「死」を意味するものである。生きていて、社会、国家、家族に迷惑をかけるだけであるから「家族」にはっきりと伝えおき良く理解して貰う事が重要となる。〔回答者：50歳代男性・息子、故人：80歳代男性〕

これらの回答の中で「迷惑をかけたくない」と述べられている対象は、子どもをはじめとする家族であることが多いが、中には社会や国家に迷惑をかけるべきではないという記述もある。

自由記述回答全体を通して、自身の死に方の理想として触れられている事柄は、「迷惑をかけない」、「穏やかで痛みなく迎えたい」、「家族などに見守られて旅立ちたい」の3つで、具体的な記述としてはこの3つでほとんど全てを占めている状況である。一方、亡くなった家族や知人への思いを語る時には前面に現れていた、「死後も続くもの」・「死後も残されるもの」といった主題に触れた記述はまれである。

## 6. 全体的考察

### 6-1 今日の死生観

以上の調査結果を踏まえながら、改めて全体的な考察を行う。まず、死一般に関する記述に認められたのは、死の問題に対するとき、死はそれ自体として焦点化されることがなく、すぐさま現下の生や日常生活へと視線が切り替えられるという顕著な傾向である。そこでは、「あの世」や「死後の世界」といった他界観のことは主題とはなっておらず、特定の宗教に対する言及もほとんど見られない。

関心が目下の日常生活の範囲内にとどまるというこうした傾向は、将来迎えるべき自分自身の死に関する記述にも共通している。そこでは、ほとんどが「迷惑をかけることなしに」「穏やかで痛みなしに」死にたいという消極的な語り口で、死を迎えるまでの過程に関する希望が

述べられるにとどまっている。

ところが、このことは、亡くなった家族のことを想う段になると別である。身近な死者に関する記述の中では、何らかのかたちにおいて継続している死者の存在や、あるいは生者に遺してくれたものがよく語られている。明確な他界観として表現されることは少ないものの、身近な死者がそこにいる場所として、「あの世」といった表現も頻繁に用いられている。

つまり、自分自身の死を考えると、および死一般を考えると、身近な死者の死を考えるとの間には、大きなギャップが横たわっている。亡くなった人の行方を思う中に表れていた「死後もなくなる何かな」といったモチーフは、自分の死を考える際にはすっかり後景に退いているのである。

## 6-2 「迷惑」をめぐる不安の支配

そもそも回答の全体的傾向として、死については直接触れずに、そこまでの介護生活について述べた記述の方がずっと多かったことは、最初の分析(2-2)で確かめたとおりである。本調査の結果を総体としてみると、死という主題について、負担をめぐる現実的な問題に関心が集まる強い傾向が認められた。それをもっとも顕著にかつ象徴的に示しているのが、「迷惑をかけたくない」という表現である。

「迷惑」に対する懸念は、自分自身の死に関する記述と、身近な人物の死に関する記述とのあいだに見られたギャップを生み出している大きな要因でもありそうである。記述回答の上で確かめうるかぎりでは、死に至るまでに自分がかけるかもしれない「迷惑」に対する心配が圧倒的に支配しており、その半面として「死ぬ前に何をしておきたいか」「何を遺して死にたいか」といった希望や、あるいは「死後の行方」といった問題に対する関心が締め出されているように見えるからである。

現代日本において、人々がもっとも理想としているのが「迷惑をかけない死」であることは、

本調査研究以外にも、すでにさまざまな意識調査が明らかにしているところでもある。「迷惑」を忌避する心情の少なからぬ部分はまさに不安感とでも表現されうるものである。「迷惑をかけたくない」というその対象が、家族から社会にまで及んでいることは、先の分析(5-2)でも確かめておいた。死をめぐる「迷惑」の問題が人々の関心を占めるこうした事態は、「長生きすることへの不安感、怖れのようなものが社会全体に垂れこめている」(山岡 2016: 7)と言われる現在の社会状況とも結びついたものであろう。

近年、日本社会の超高齢化やそれに伴う諸々の社会問題が、声高に叫ばれている。「年金破綻」「医療破綻」「介護難民」「孤独死」「2025年問題」等々、テレビや新聞はこの種の情報に溢れている。こうした状況にあって、死生をめぐる人々の関心がそうした経済的・社会的問題へと誘導されているのか、あるいは現代日本の死生観のあり方がそうした現実的問題への関心の集中を生み出しているのか、おそらくは両方がある程度真実であろう。

しかしまた、人が「周りに迷惑をかけたくない」と述べる時、そこに見出されるのは経済的・社会的な負担に対する懸念や不安だけでもない。しばしば「迷惑」とだけ述べられ、具体的な負担の対象や内容が特定されないことの裏には、自分自身が、人のケアを必要とするような依存状態に陥ること自体に対する怖れや不安、あるいは拒絶の感情が含まれているように思われる。死の問題に関してしばしば「死の受容／拒絶」ということが取りざたされてきたが、これになぞらえて言えば、ここで問題になっていることは死の前段階における「依存状態の受容／拒絶」である。先に確かめた、死の問題に対する視点が即座に現下の日常生活へと転ずるという機序は、死に至る過程における依存状態に関する想像を避けているという点で、依存状態に対する拒否感と表裏一体のものである。

日本の社会システムの将来に対する不安感、

死に至る過程でかかるかもしれない経済的・社会的な負担の大きさに対する不安感、そして自分が多くのケアを必要とする依存状態に陥ることに対する拒否感、これらの要素がお互いにお互いを強めあいながら、「迷惑」という言葉を通じて現代日本の死生観に反映しているのではないだろうか。

### 6-3 死生観の実際

先から話題にしているギャップに関して、身近な死者について行方に想いを馳せる心情と、自分の死について「家族に迷惑をかけたくない」と心配する心情は、どちらも近い家族に対する配慮に発したものである点で共通している。しかし結果として、家族を間近に看取った本調査の対象者にしても、自分自身の問題としては、死に至るまでの過程においてかけるかもしれない「迷惑」を恐れるばかりに、死そのものには思いが及んでいないのだと言えそうである。そしてこうした事態こそが、現代日本の死生観の一現状に他ならない。

以上の考察が示唆していることのひとつは、人々の死に対する姿勢や考え、すなわち死生観というものが、療養場所の選択や介護負担・経済的負担といった「現実的問題」とは切り離しえないものだという点である。人々において死という主題は、それとして焦点化されて意識されているとは限らないし、またしばしば経済的な関心と密接に結びついて意識されている。

ケア関連分野を含めて、従来の死生観研究は、たとえば魂の存続に関わる信念や、天国や地獄といった他界観の問題をそれとして切り取って提示するものがほとんどである。しかし、本稿の分析から得られた洞察からすれば、そうした研究が光を当てているのは、実際の人々の死に対する姿勢や考えの総体ではなく、その一要素だということになる。

こうした認識は、ホスピス・緩和ケアの実践のように、実際に死の問題に直面した人々と接する場合においてはとくに大切になろう。ホス

ピス・緩和ケアの文脈で「スピリチュアルベイン」が主題として論じられる際も、本稿で言う狭義における死生観や、他界観の問題を切り取って扱う傾向が見られる。もちろん、現実の看取りの場面においても、狭義における死生観や他界観の問題は重要であろうが、それが、ケアサービスの選択や介護負担・経済的負担、家族関係などのいわゆる「現実的問題」と切り離しうようなかたちで表現されることは少ないのではないだろうか。本調査に寄せられた回答全体の傾向が示しているのは、こうした事情のように思われる。

### 付記

本研究はJSPS科研費25285150の助成を受けたものです。

### 註

- (1) 死生観言説に寄せられてきた関心の社会的整理としても、島藪 (2012) が基礎的な文献である。
- (2) 本稿で取り上げた設問以外の、本調査の全体像と詳細については、相澤出・田代志門・藤本穰彦・板倉有紀・諸岡了介・河原正典『2015年実施在宅ホスピス遺族調査報告書』(科研費報告書、2016年12月発行)にて扱っている。

### 参考文献

- 浅見洋・中村順子・伊藤智子他 2016「ルーラルエリアにおける住民の死生観と終末期療養希望の変容」『石川看護雑誌』13: 33-43.
- 安保英勇 2008「心理学から見る死生観」近藤功行・小松和彦編著『死の儀法』ミネルヴァ書房、191-213。
- 海老根理絵 2008「死生観に関する研究の概観と展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』48: 193-202.
- 加藤周一、M. ライシュ、R. リフトン 1977『日本人の死生観』上・下、矢島翠訳、岩波書店。

- 金児暁嗣 1997『日本人の宗教性』新曜社。
- 京田亜由美・加藤咲子・中澤健二他 2009「死を意識する病を抱える患者の死生観に関する研究の動向と課題」『群馬保健学紀要』30: 49-58.
- 島菌進 2012『日本人の死生観を読む』朝日新聞出版。
- 杉山喜朗・方波見康雄・中野修他 1986「高齢者の生き方の質と「死生観」の関連性についての研究」『社会老年学』24: 52-66.
- 中木里実・多田敏子 2013「日本人高齢者の死生観に関する研究の現状と課題」『四国大学紀要』41: 1-10.
- 高岡哲子・紺野英司・深澤圭子 2009「高齢者の死生観に関する過去10年間の文献検討」『名寄市立大学紀要』3: 49-58.
- 林文 2007「社会調査からみる宗教・素朴な宗教的感情と死生観」東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報 2007』リトン、129-154。
- 彦聖美・田島祐香 2011「高齢者が捉える生と死に関する文献検討」『ホスピスと在宅ケア』19(1): 42-49.
- 藤田みさお 2000「来世を信じることは死の不安をやわらげるか」カール・ベッカー編『生と死のケアを考える』法藏館、154-183。
- 山岡淳一郎 2016『長生きしても報われない社会』筑摩書房。
- 吉沢勲 1968「老人の死に対する態度」『精神医学』10(4): 49-55.
- NHK放送文化研究所編 2015『現代日本人の意識構造 第八版』NHK出版。